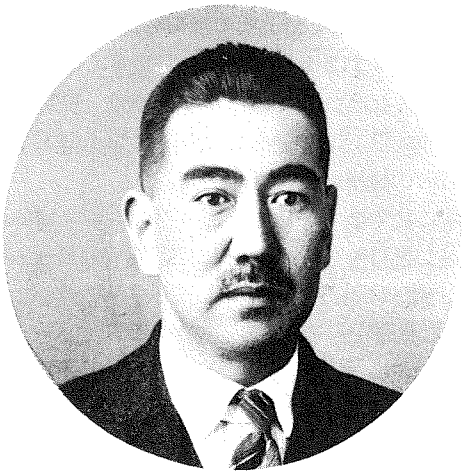
最近歸朝者の印象錄

渡米小感

鶴田勝三



Mr. Katsuzo Tsuruta.
最近の鶴田社長

工事畫報社長たる鶴田勝三氏は六回目の渡米から二月十三日歸朝して目下關東水力電氣會社作久發電所の設計工事に沒頭しつゝあるが忙中所感の一片を次の如く漏された。(編者)

今回は五年振りで渡米したので、歐洲大戰後の米國を視る事は非常に興味を覺えたのであるが、唯滯在豫定が短時日であつた上に、約一ヶ月も歸朝を早めた關係上、思ふ樣な視察が出來なかつた事を遺憾とする。

渡米の主要目的であつた水力發電工事の事に就て申せば、米國の發電事業は漸次大量生產に傾きつゝあつて、前年迄は三萬乃至五萬馬力位の發電所が一般的であつたのに、今日では二十萬馬力乃至三十萬馬力といふ計畫が盛に行はれつゝあるといふ事である。

尙最近セントローレンス川の附近では、一個所の發電所に於て百萬馬力發電の計畫さへ進行してゐる。此の傾向からして水車發電機類も五萬六萬といふ容量に增大して來てゐる。之を二三萬發電の間に彷徨してゐる我國の現狀に比較すると漸く彼の後塵を拜するの感がありはせぬか。尤も彼我地勢上の相違、天然的資源の關係にもよることではあるが、斯くの如く大規模の發電が實現可能なりとせば建設に當つて出來る丈け機械力を利用し、勞力の節約が出來て、而も一馬力當りの設備費は小規模のものよりも遙かに低廉になる。之に隨つて設計監督費、運搬費等に於ても同樣で、又總係費等は規模を大きくしたからと云つて其の割合にかゝるものではない。

從つて建設費が一キロワット當り百弗を超えるものは稀なる有樣であるから、電氣料金の如きも驚く可き廉價を以て供給せられてゐる。一例を申せばユタ州のグレートフォール發電所では一キロワット時〇・〇八仙即我一厘六毛で化學工業に隨時供給をしてゐるそうである。現代の產業は其大と小とに拘はらず電化の普及を要求してゐるのであるが、安價なる電力料金は實に其基底をなすものである。

天然の資源必ずしも豐富ならず、產業の興隆は常に識者の頭腦をなやますところの我國の現狀に於て本事業を經營するとせば如何にして低廉にして且完全なる發電工事の建設をなすべき乎。

是獨り吾人技術者の解決するを得べき問題であり、且其の責任も重大であると思ふのである。